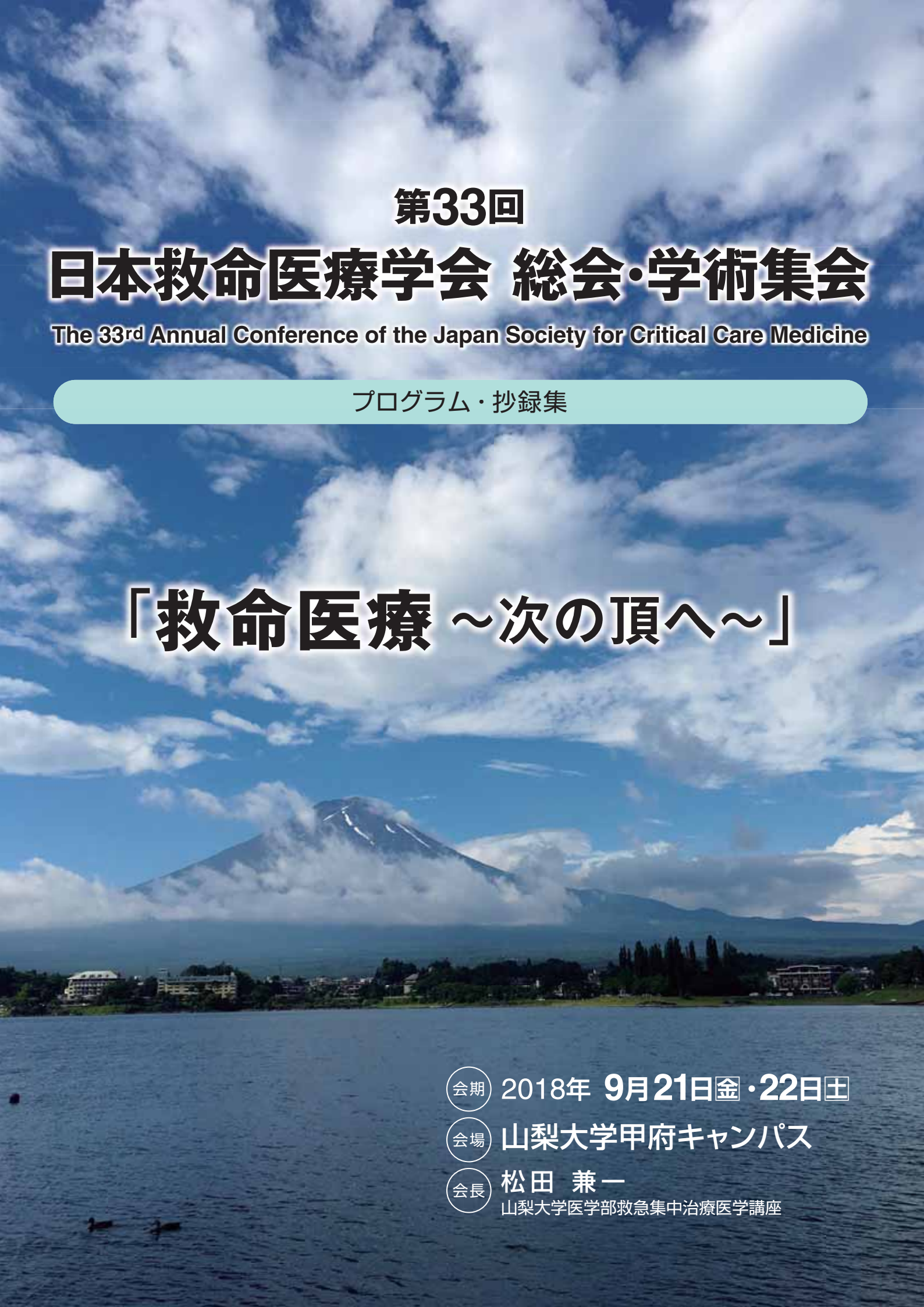


第33回
日本救命医療学会 総会・学術集会

The 33rd Annual Conference of the Japan Society for Critical Care Medicine

プログラム・抄録集

「救命医療 ～次の頂へ～」

会期 2018年 9月21日(金)・22日(土)

会場 山梨大学甲府キャンパス

会長 松田 兼一
山梨大学医学部救急集中治療医学講座

第33回

日本救命医療学会 総会・学術集会

The 33rd Annual Conference of the Japan Society for Critical Care Medicine

プログラム・抄録集

「救命医療 ～次の頂へ～」

会期 2018年 9月21日(金)・22日(土)

会場 山梨大学甲府キャンパス

会長 松田 兼一
山梨大学医学部救急集中治療医学講座

ごあいさつ

第33回日本救命医療学会総会・学術集会開催にあたって

第33回日本救命医療学会総会・学術集会
会　長　**松田 兼一**　山梨大学医学部
救急集中治療医学講座 教授

このたび、第33回日本救命医療学会総会・学術集会会長を仰せつかりました、山梨大学医学部救急集中治療医学講座の松田兼一でございます。大変光栄なことと学会員の皆様に深く感謝いたします。

学会のテーマを“救命医療 ―次の頂きへ―”とし、平成30年9月21日（金曜日）、22日（土曜日）の日程で、山梨県甲府市にございます山梨大学甲府キャンパスにて開催いたします。山梨大学出身の大村智博士が2015年ノーベル医学・生理学賞を受賞されたことを記念して設立され、本年7月19日に開館されたばかりの大村智記念学術館内に第1会場を設けました。学会の合間に記念館を見学して頂ければ幸いです。

本会のテーマである“救命医療 ―次の頂きへ―”ですが、救命医療における治療技術が昨今著しい進歩を遂げているものの、改善・進歩の余地がまだまだ充分にあり、我々はその先を目指して進んで行かなければならないという思いを込めて決定しました。一般演題21題、シンポジウム等の特別演題は15題となりました。ご協力ありがとうございました。

特別講演として千葉大学名誉教授で国際医療福祉大学大学院特任教授の平澤博之先生に「Critical Care における “Less is More”」についてご講演頂きます。救命医療におけるこれまでの進歩を振り返りその功罪について考える貴重な機会になると確信しております。また救命医療における治療技術として、脳に対する低温療法と肺に対する ECMO を取り上げ、第一人者の方々に座長及びシンポジストをお務め頂き、その現状と未来についてご議論頂く予定です。さらに、心に対する PCPS と腎に対する血液浄化療法を取り上げ、「CPA に PCPS は有用か？」「敗血症に non-renal indication RRT は有用か？」のタイトルで2題の debate セッションを設けました。新しい取り組みとして、演者の先生方に無理を申し上げ、本 debate セッションを2ラウンド制にいたしました。つまり Pro の立場と Con の立場から各ラウンドで、攻守交代してご講演頂き、お一人で両方の立場からご意見を主張して頂くことにしました。とても興味深い議論が展開されると信じております。救命医療のプロとして、我々は最新の治療における功罪を十分理解した上で治療の適応を考えなければなりません。救命医療を行う際に我々は心の中で Pro と Con のそれぞれの考えを常に思い巡らし、患者さんの目の前で日々葛藤しています。治療そのものの理解だけではなく第一人者の方々の日頃の考え方も参考になると思います。楽しみにして下さい。

実り多い学会になるためには、多くの皆様の学会御参加が必要です。山梨の地で皆様を心よりお待ち申し上げております。何卒よろしくお願い申し上げます。

平成30年8月吉日

日本救命医療学会　役員・委員会名簿

理事長　石倉　宏恭

理事
織田　成人　北野　光秀　小池　薫　小谷　穣治　阪本雄一郎
澁谷　正徳　平　泰彦　松田　兼一　溝端　康光　矢口　有乃

評議員
池田　弘人　石川　雅健　石倉　宏恭　石松　伸一　磯谷　栄二
井上　茂亮　井上　義博　上田　敬博　江口　豊　織田　成人
小野　聡　北野　光秀　喜多村泰輔　小池　薫　小井土雄一
小谷　穣治　坂本　哲也　阪本雄一郎　佐々木淳一　貞広　智仁
澁谷　正徳　鈴木　淳一　鈴木　泰　平　泰彦　高須　修
武田　宗和　武山　直志　長尾　建　中尾　博之　西田　修
仁科　雅良　二宮　宣文　簾本　恵介　平川　昭彦　星野　正己
増野　智彦　松田　潔　松田　兼一　溝端　康光　村尾　佳則
森口　武史　森澤健一郎　矢口　有乃　山本　俊郎　行岡　秀和
横田　裕行　渡邉　栄三

編集委員会

編集委員長：高須　修

編集委員：池田　弘人　石川　雅健　織田　成人　北澤　康秀　北野　光秀
澁谷　正徳　鈴木　泰　平　泰彦　星野　正己　増野　智彦
溝端　康光

名誉会員
相川　直樹　明石　勝也　浅井　康文　遠藤　重厚　太田　宗夫
加来　信雄　黒川　顕　小濱　啓次　坂田　育弘　坂本　照夫
篠崎　正博　篠澤洋太郎　島崎　修次　杉山　貢　鈴木　忠
髙橋　愛樹　田中　孝也　丹正　勝久　中川　隆雄　中谷　壽男
野口　宏　林　成之　原口　義座　平澤　博之　堀　進悟
山本　保博

歴代会長・会期・開催地

会　　長	会　期	開催地
【救命救急医療研究会】		
1. 山本　保博（日本医科大学救急医学）	1986.10.25	東　京
2. 鈴木　　忠（東京女子医科大学救急医学）	1987.11.28	東　京
3. 中谷　壽男（帝京大学救命救急センター）	1988.10.8	東　京
4. 原口　義座（東京警察病院外科）	1989.10.21	東　京
5. 山本　保博（日本医科大学救急医学）	1990.10.27	東　京
6. 鈴木　　忠（東京女子医科大学救急医学）	1991.10.26	東　京
7. 原口　義座（東京警察病院外科）	1992.10.28	東　京
8. 中谷　壽男（帝京大学救命救急センター）	1993.11.6	東　京
【日本救命医療研究会】		
9. 太田　宗夫（大阪府千里救命救急センター）	1994.9.17	大　阪
10. 金子　正光（札幌医科大学救急集中治療部）	1995.9.2	北海道
11. 小濱　啓次（川崎医科大学救急部）	1996.9.2	岡　山
12. 加来　信雄（久留米大学医学部救急医学）	1997.9.20	福　岡
13. 田中　孝也（関西医科大学救急医学）	1998.9.17	大　阪
14. 高橋　愛樹（昭和大学藤が丘病院救急医学）	1999.9.3	神奈川
15. 中川　隆雄（東京女子医科大学第二病院救命救急センター）	2000.9.22	東　京
【日本救命医療学会】		
16. 相川　直樹（慶應義塾大学医学部救急医学）	2001.11.9	東　京
17. 篠﨑　正博（和歌山県立医科大学救急・集中治療部）	2002.9.21	和歌山
18. 浅井　康文（札幌医科大学救急集中治療部）	2003.9.18-19	北海道
19. 林　　成之（日本大学医学部救急医学）	2004.9.17-18	東　京
20. 杉山　　貢（横浜市立大学附属市民総合医療センター高度救命救急センター）	2005.9.23-24	神奈川
21. 遠藤　重厚（岩手医科大学医学部救急医学）	2006.9.30	岩　手
22. 坂田　育弘（近畿大学医学部附属病院救命救急センター）	2007.9.14-15	大　阪
23. 明石　勝也（聖マリアンナ医科大学）	2008.9.5-6	東　京
24. 黒川　　顕（日本医科大学武蔵小杉病院）	2009.9.4-5	東　京
25. 石井　　昇（神戸大学大学院医学研究科災害・救急医学）	2010.9.10-11	神　戸
26. 織田　成人（千葉大学大学院医学研究院救急集中治療医学）	2011.9.16-17	千　葉
27. 丹正　勝久（日本大学医学部救急医学系救急集中治療医学分野）	2012.9.13-14	東　京
28. 坂本　照夫（久留米大学医学部救急医学）	2013.9.20-21	久留米
29. 池田　寿昭（東京医科大学八王子医療センター特定集中治療部）	2014.9.19-20	東　京
30. 小谷　穣治（兵庫医科大学救急・災害医科講座）	2015.9.11-12	兵　庫
31. 石倉　宏恭（福岡大学救命救急医学講座）	2016.9.16-17	福　岡
32. 平　　泰彦（聖マリアンナ医科大学救急医学）	2017.9.22-23	神奈川
33. 松田　兼一（山梨大学医学部救急集中治療医学講座）	2018.9.21-22	山　梨

学会参加の皆様へ

1．参加受付

日	時　間
9月21日（金曜日）	13：00～18：00
9月22日（土曜日）	8：30～16：00

2．学会参加費・抄録集販売費

医師・一般・企業関係者	10,000円
初期研修医・医師以外の医療従事者・研究者	5,000円
学部学生（学生証をご提示ください）	無　料
抄録集	2,000円

会場では必ずネームカードに氏名・所属を記入の上見やすい場所にご掲示ください。

3．年会費納入・新規入会手続き

会期中の受付場所：総合受付カウンター横

日本救命医療学会で年会費を未納の方は、受付にて納入をお願いいたします。また新規入会を希望される方は、当日受付にて承ります。

〈問い合わせ先〉　日本救命医療学会事務局
〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1
福岡大学医学部救命救急医学
TEL：092-801-1011　FAX：092-862-8330
E-mail：js-com@fukuoka-u-ac-jp

本学会の年会費は5,000円です。

4．クローク

Y号館に準備がございます。貴重品や現金、カード類、精密機械、破損変質しやすいものなどはお預かりできません。お預かりした物品は引換証と引き換えにお引き渡しいたします。

5．その他

会場内では、携帯電話をマナーモードに設定ください。
大会長の許可の無い掲示・展示・印刷物の配布・録音・写真撮影・ビデオ撮影はお断りしております。

座長・発表者へのご案内

1. 進行情報

セッション名	発　表	質　疑	総合討論	打ち合わせ
シンポジウム1	12分	発表に含む	30分	なし
シンポジウム2	12分	5分	なし	なし
協賛セッション	10分	5分		
一般演題	7分	3分		

2. 座長の皆さまへ

1）参加受付後、座長受付カウンターにお立ち寄りください。

2）担当セッション開始15分前には、会場前方の「次座長席」にご着席ください。

3. 発表者の皆さまへ

1）発表者の方はセッション開始30分前までにPC受付を済ませてください。

2）次演者は、前演者の登壇時には前列の「次演者席」にお座りください。

3）発表は時間厳守でお願いいたします。時間を過ぎた場合には座長の采配で発表途中でも中断する場合があります。

4）倫理的配慮・個人情報保護

- 個人情報が特定されないよう、十分な倫理的配慮をお願いします。
- 個人情報に抵触する可能性がある内容は、患者あるいはその代理者からインフォームド・コンセントを得た上で、患者個人情報が特定されないよう十分留意して発表してください。
- 個人情報が特定される発表は禁止いたします。

5）臨床研究の利益相反について

臨床研究では（培養細胞や実験動物を使用した基礎研究に関しては対象外）、筆頭演者自身の過去1年間における発表内容に関連する企業や営利を目的とする団体に関わる利益相反状態の申告が必要です。口演発表者は表紙の次のスライドに開示してください。

6）PC発表ファイル持ち込みによるご発表の場合

- データ受け渡しはUSBメモリでお願いいたします。
- 当方で準備するプレゼンテーション用PCにはPowerPoint2016を準備しております。作成された発表ファイルは事前にPowerPoint2016で再生可能なことをご確認ください。
- フォントはOS標準フォントをご使用ください。
- ファイルサイズは100MB以下としてください。

- 発表者用ツールはご使用できません。
- ご発表に動画が含まれる場合には念のためご自身の PC 持ち込みをお勧めいたします。
- 音声には対応しておりません。
- ファイルはご発表後、事務局で責任を持って消去いたします。

7）PC 本体持ち込みによる発表の場合

- Macintosh で作成されたファイルの場合にはご自分のマックをお持ちください。
- バックアップとして必ず USB メモリもお持ちください。
- こちらで準備する接続コネクタは D-sub mini 15pin です。
- パスワードは“なし”に、スクリーンセーバーや省電力設定は off に設定をお願いいたします。

学会関連行事

◆規約改正委員会

日　時：9月21日（金）13：30～13：50

場　所：アーバンヴィラ 古名屋ホテル 8F チェディー

◆編集委員会

日　時：9月21日（金）14：00～14：50

場　所：アーバンヴィラ 古名屋ホテル 8F チェディー

◆理 事 会

日　時：9月21日（金）15：00～15：50

場　所：アーバンヴィラ 古名屋ホテル 8F チェディー

◆評議委員会

日　時：9月21日（金）16：00～16：50

場　所：アーバンヴィラ 古名屋ホテル 2F バンヤンツリー

◆会員懇親会

日　時：9月21日（金）18：00～20：00

場　所：アーバンヴィラ 古名屋ホテル 2F ルンブラン

◆総　会

日　時：9月22日（土）13：00～13：10

場　所：山梨大学 甲府キャンパス 第1会場

日本救命医療学会編集委員会からのお知らせ

本学会で発表されました演題は後日、編集事務局より「日本救命医療学会機関誌（Journal of Japanese Society for Critical Care Medicine）」へのご執筆を依頼いたしますので、ご了承ください。

投稿規定は、本抄録集に掲載してございますので、規定をお守りいただきご投稿くださいますようよろしくお願い申し上げます。

◆日本救命医療学会 事務局
〒814-0180　福岡市城南区七隈7-45-1
福岡大学医学部 救命救急医学
TEL：092-801-1011（内線2928）／ FAX：092-862-8330
E-mail：js-com@fukuoka-u.ac.jp

◆日本救命医療学会 編集委員会
〒830-0011　福岡県久留米市旭町67
久留米大学医学部 救急医学講座
TEL：0942-31-7732／ FAX：0942-35-3920
編集委員長：高須　修

次期大会のお知らせ

大会長：溝端　康光　大阪市立大学大学院医学研究科 救急医学 教授

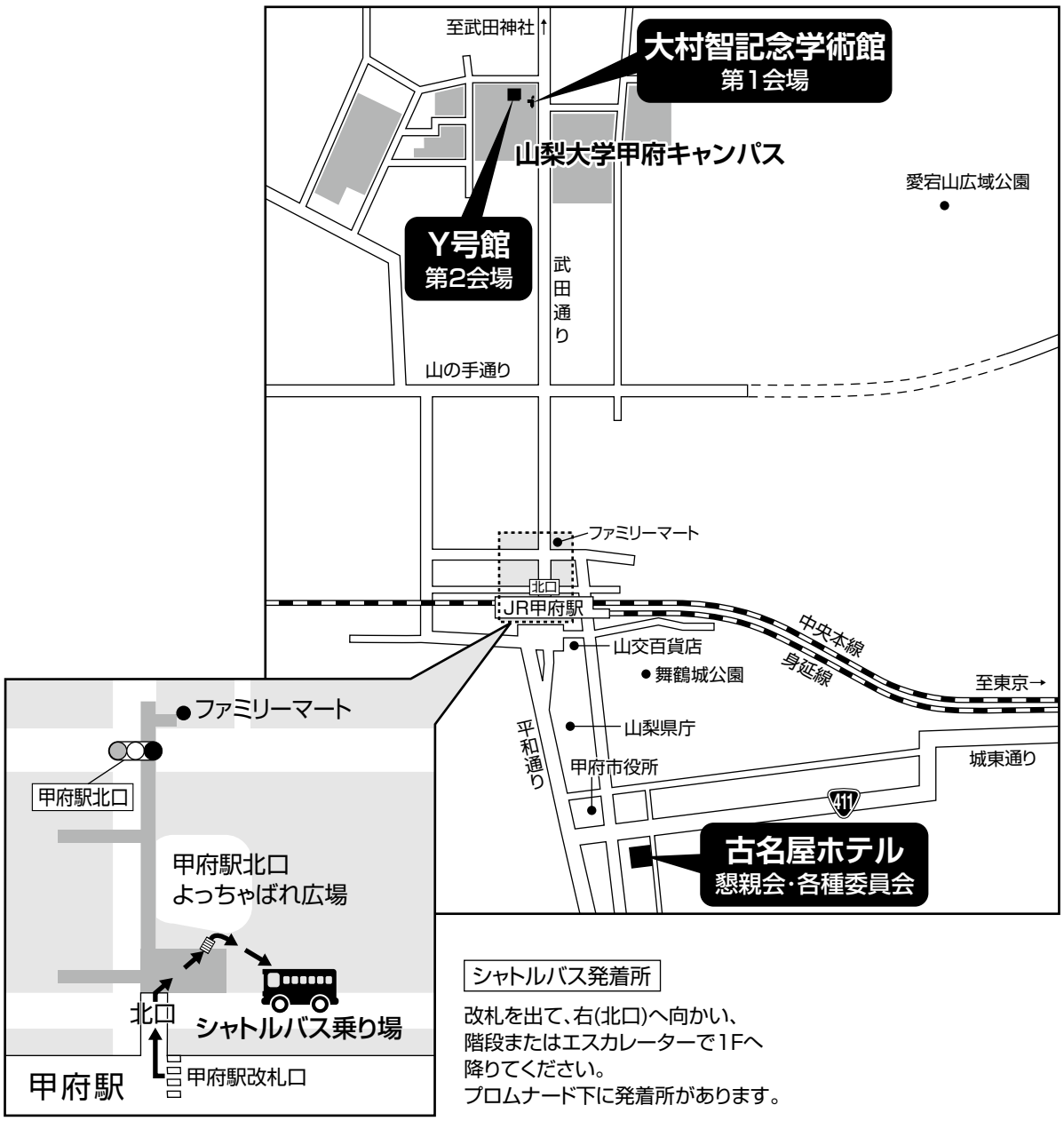
開催地：大阪府

会　場：大阪市立大学医学部学舎
〒545-8585　大阪市阿倍野区旭町1-4-3

会　期：2019年9月27日（金）、28日（土）

事務局：第34回日本救命医療学会 総会・学術集会 事務局
大阪市立大学大学院医学研究科 救急医学
〒545-8585　大阪市阿倍野区旭町1-4-3
TEL：06-6645-3987／ FAX：06-6645-3988

交通案内図



シャトルバス発着所

改札を出て、右(北口)へ向かい、
階段またはエスカレーターで1Fへ
降りてください。
プロムナード下に発着所があります。

会場へのアクセス

■ **最寄駅から徒歩**　JR甲府駅北口より武田通りを北上　所要時間約15分

■ **公共バス**　JR甲府駅北口バスターミナル2番乗り場「武田神社」または「積翠寺」行き
バス停「山梨大学」下車　所要時間約5分

■ **自家用車**　中央自動車道「甲府昭和IC」で下りて、一般道を北東の方角へ
国道20号線またはアルプス通り経由で約20分
※周辺駐車場をご利用ください。

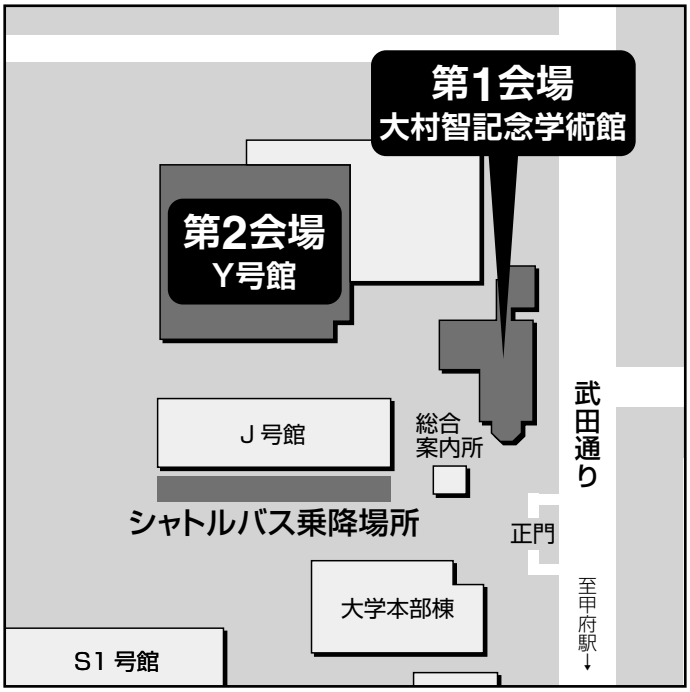
■ **シャトルバス**　甲府駅北口からシャトルバスを準備いたします。
※シャトルバスに接続する電車の目安を次ページに記載しています。

甲府駅発着の全ての列車を記載しているわけではありません。
電車運行は8月時点での予定です。変更がある場合がありますのでJRのHP等でご確認下さい。

列車名（参考）	新 宿 発	甲 府 着	シャトルバス 甲府駅北口発	シャトルバス 山梨大学 学会会場着
あずさ71号（臨時）	6：30	8：06	8：15	8：25
スーパーあずさ1号	7：00	8：28	8：35	8：45
かいじ173号（臨時）	7：03	8：36	8：45	8：55
あずさ3号	7：30	9：07	9：15	9：25
スーパーあずさ5号	8：00	9：28	9：35	9：45
あずさ7号	8：30	10：15	10：25	10：35
あずさ9号	9：00	10：37	10：45	10：55

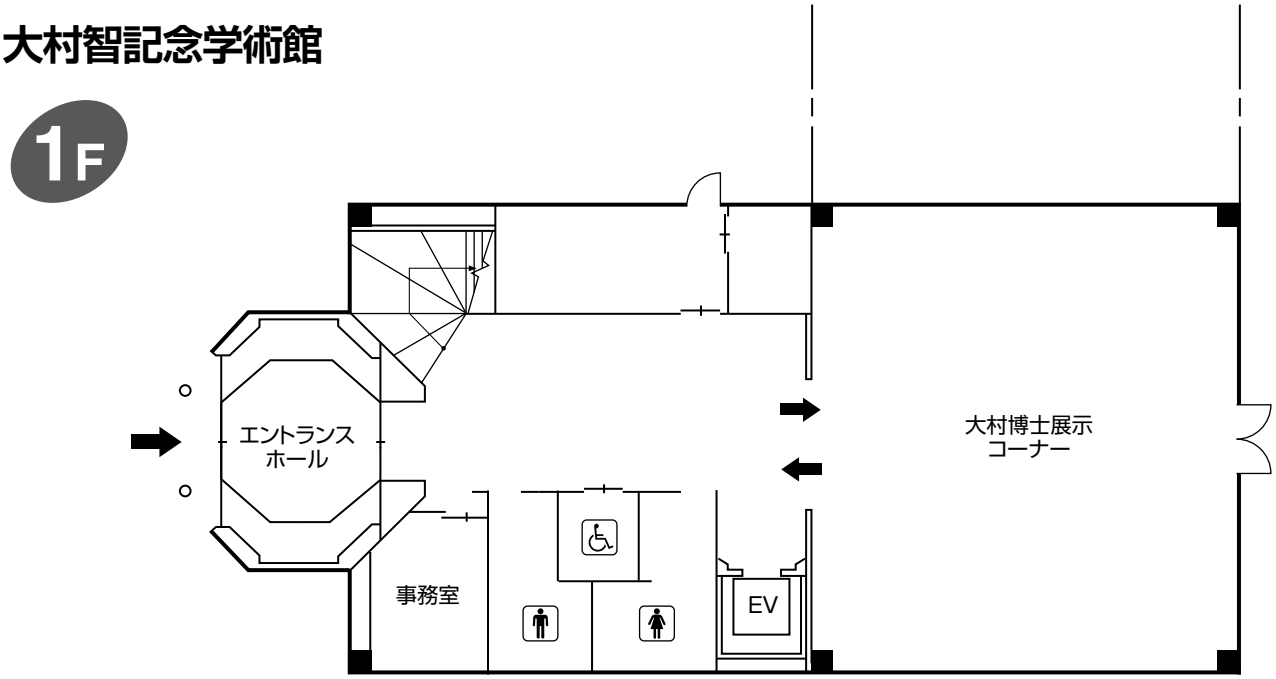
シャトルバス 山梨大学 学会会場発	シャトルバス 甲府駅北口着	列車名（参考）	甲 府 発	新 宿 着
14：30	14：40	あずさ20号	15：03	16：34
15：40	15：50	スーパーあずさ22号	15：55	17：24
16：50	17：00	かいじ120号	17：26	19：06
17：25	17：35			
17：35	17：45	スーパーあずさ28号	18：05	19：36

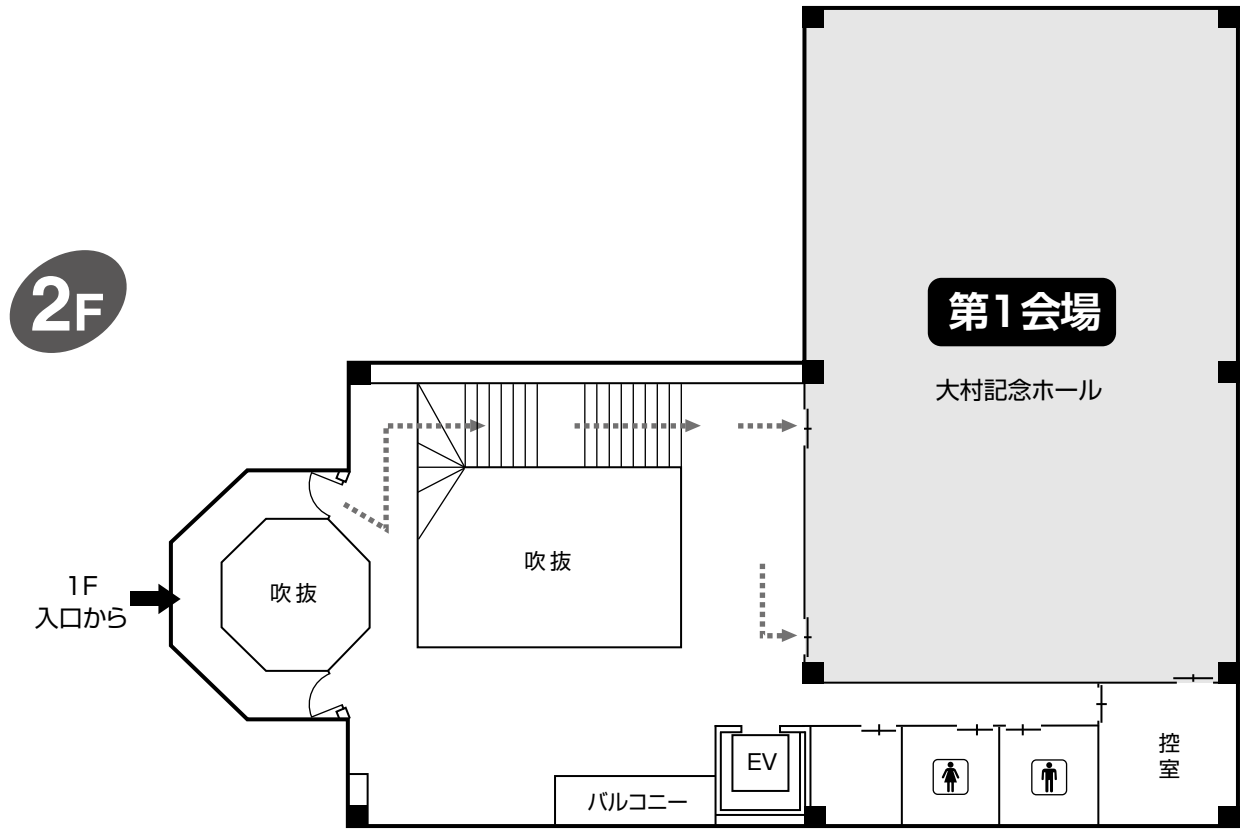
構　内　図



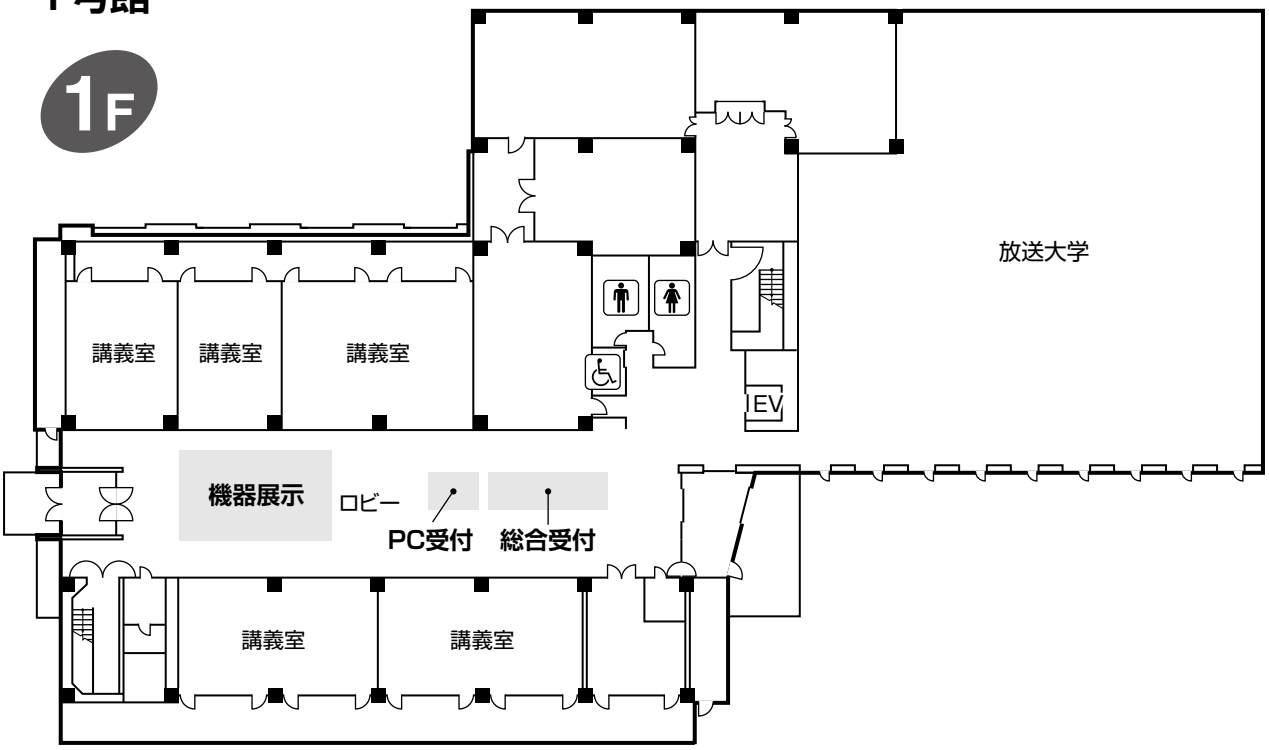
会場案内図

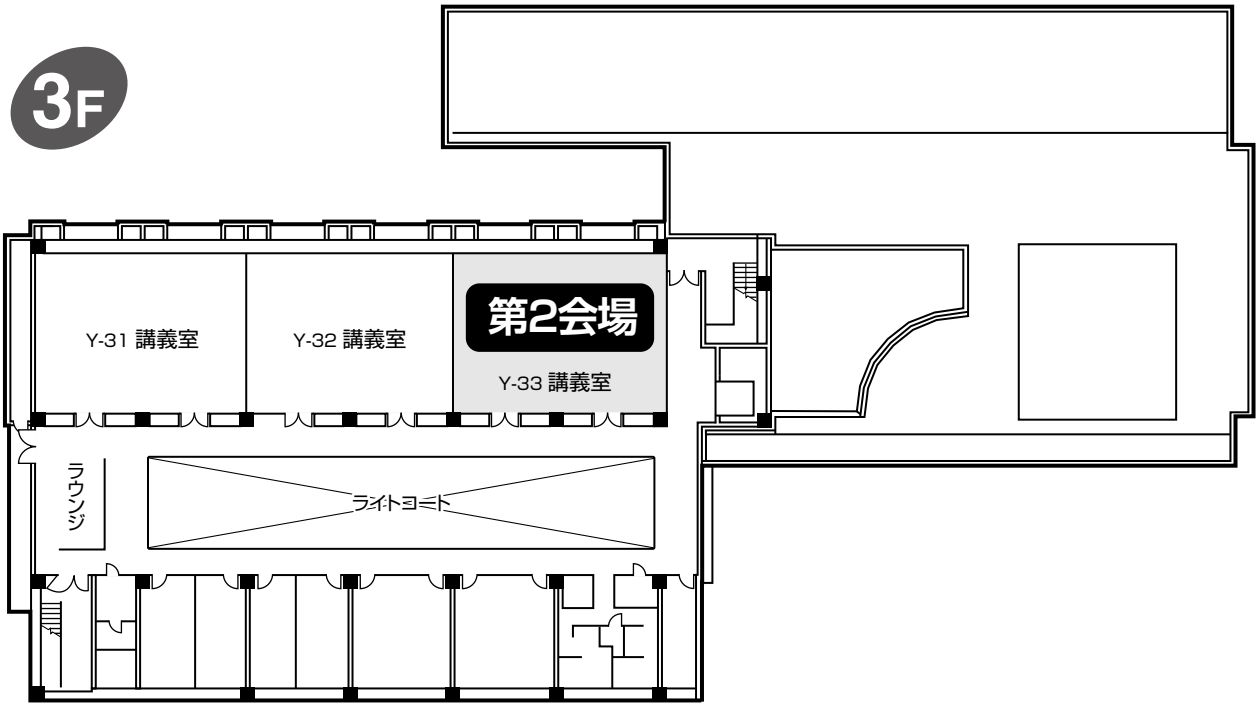
大村智記念学術館





Y号館


1F
放送大学
講義室
講義室
講義室
EV
機器展示
ロビー
PC受付
総合受付
講義室
講義室


3F
Y-31 講義室
Y-32 講義室
第2会場
Y-33 講義室
ラウンジ
ライトコート

日　程　表

9月21日(金)

古名屋ホテル

- 13:30〜13:50　規約改正委員会　8階 チェディー
- 14:00〜14:50　編集委員会　8階 チェディー
- 15:00〜15:50　理事会　8階 チェディー
- 16:00〜16:50　評議委員会　2階 バンヤンツリー
- 17:00〜18:00　イブニングセミナー　アレルギーと体内時計　中尾 篤人　2階 バンヤンツリー
- 18:00〜20:00　懇親会　2階 ルンブラン

9月22日(土)

第1会場
大村智記念学術館 大村記念ホール

- 8:50〜　開会式
- 9:00〜10:30　シンポジウム 1　意識障害に対する脳低温療法の現状と未来　座長：木下 浩作　シンポジスト：守谷 俊、畝本 恭子、原田 正公、櫻井 淳
- 10:40〜11:40　Pros vs Cons セッション 1　敗血症に non-renal indication RRT は有用か？　座長：森口 武史　土井 研人 VS 服部 憲幸
- 11:50〜12:50　ランチョンセミナー　迅速脳波測定の普及と地域医療連携　座長：松田 兼一　演者：新井 隆男　共催：日本光電工業株式会社
- 13:00〜13:10　総会
- 13:20〜14:20　特別講演　Critical Care における“Less is More”　座長：松田 兼一　演者：平澤 博之
- 14:30〜15:30　Pros vs Cons セッション 2　CPAにPCPSは有用か？　座長：松田 兼一　阪本 雄一郎 VS 高須 修
- 15:40〜17:10　シンポジウム 2　呼吸不全に対するECMO現状と未来　座長：市場 晋吾、森口 武史　シンポジスト：青景 聡之、清水 敬樹、北村 伸哉、外間 亮、大下 慎一郎
- 17:10〜17:20　閉会式

第2会場
Y号館 Y-33講義室

- 9:00〜9:40　一般演題 1　ECMO　座長：矢口 有乃
- 9:50〜10:30　一般演題 2　感染　座長：喜多村 泰輔
- 10:40〜11:40　一般演題 3　その他　座長：池田 寿昭
- 14:30〜15:30　協賛セッション　敗血症性DICの治療　座長：江口 豊　協賛：旭化成ファーマ株式会社
- 15:40〜16:50　一般演題 4　外傷・熱傷　座長：溝端 康光、小谷 穣治

大会プログラム

9月21日（金）　古名屋ホテル

規約改正委員会　13：30～13：50　　8階 チェディー

編集委員会　14：00～14：50　　8階 チェディー

理　事　会　15：00～15：50　　8階 チェディー

評議委員会　16：00～16：50　　2階 バンヤンツリー

イブニングセミナー　17：00～18：00　　2階 バンヤンツリー

ES　アレルギーと体内時計

中尾 篤人　山梨大学 医学部 免疫学講座

懇　親　会　18：00～20：00　　2階 ルンブラン

9月22日（土） 第1会場（大村智記念学術館 大村記念ホール）

開 会 式 8：50～

シンポジウム1 9：00～10：30

［ 意識障害に対する脳低温療法の現状と未来 ］

座長：木下 浩作（日本大学医学部 救急医学系 救急集中治療医学分野）

S1-1 中枢神経系重症患者に対して体温管理を行うための注意点を総括する

守谷 俊　自治医科大学附属さいたま医療センター 救急科

S1-2 急性脳障害に対する体温管理療法の現状と課題

畝本 恭子　日本医科大学多摩永山病院 救命救急センター

S1-3 国立病院機構熊本医療センターにおける意識障害に対する脳低温療法の実施状況

原田 正公　国立病院機構熊本医療センター 救命救急・集中治療部

S1-4 心停止後脳障害の病態と治療の可能性

櫻井 淳　日本大学 医学部 救急医学系 救急集中治療医学分野

Pros vs Cons セッション1 10：40～11：40

座長：森口 武史（山梨大学医学部 救急集中治療医学講座）

PCS1 敗血症に non-renal indication RRT は有用か？

土井 研人　東京大学医学部附属病院 救急科
VS
服部 憲幸　千葉大学大学院 医学研究院 救急集中治療医学

ランチョンセミナー 11：50～12：50

共催：日本光電工業株式会社

座長：松田 兼一（山梨大学医学部 救急集中治療医学講座）

LS 迅速脳波測定の普及と地域医療連携

新井 隆男　東京医科大学八王子医療センター 救命救急センター

総　会 13：00～13：10

特別講演　13：20～14：20

座長：松田 兼一（山梨大学医学部 救急集中治療医学講座）

SL　Critical Care における“Less is More”

平澤 博之　千葉大学 名誉教授

Pros vs Cons セッション2　14：30～15：30

座長：松田 兼一（山梨大学医学部 救急集中治療医学講座）

PCS2　CPA に PCPS は有用か？

阪本 雄一郎　佐賀大学 医学部 救急医学講座
VS
高須　　修　久留米大学 医学部 救急医学講座

シンポジウム2　15：40～17：10

［呼吸不全に対する ECMO 現状と未来］

座長：市場 晋吾（日本医科大学付属病院 外科系集中治療科）
森口 武史（山梨大学医学部 救急集中治療医学講座）

S2-1　ECMO 搬送の現状と方向性

青景 聡之　岡山大学病院 高度救命救急センター

S2-2　Mobile ECMO への取り組みの現状と未来

清水 敬樹　東京都立多摩総合医療センター 救命救急センター

S2-3　致死的喘息発作（near-fatal asthma：NFA）に対する VV-ECMO の適応と臨床効果について

北村 伸哉　君津中央病院 救命救急センター 救急・集中治療科

S2-4　当院における院外心肺停止例への ERCP 導入に要した時間と ICU 生存率の推移に関する検討

外間 亮　福岡大学病院 救命救急センター

S2-5　間質性肺炎における ECMO の可能性

大下 慎一郎　広島大学大学院 救急集中治療医学

閉 会 式　17：10～17：20

9月22日（土）　第2会場（Y 号館 Y-33 講義室）

一般演題1　9：00～9：40

［ ECMO ］　座長：矢口 有乃（東京女子医科大学 救急医学）

O1-1　低体温症で搬送され救急外来で CPA となり PCPS を施行した敗血症の1例

岩井 俊介　聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 救命救急センター
聖マリアンナ医科大学 救急医学

O1-2　重症呼吸不全に対する awake ECMO の功罪

川野 恭雅　福岡大学病院 救命救急センター

O1-3　体外循環式心肺蘇生法（ECPR）導入に難渋した一症例

田北 無門　聖マリアンナ医科大学 医学部 救急医学講座

O1-4　病態およびリハビリテーションに応じた栄養療法
～ ECMO 管理を要した極度低栄養症例～

原 嘉孝　藤田保健衛生大学 医学部 麻酔・侵襲制御医学講座

一般演題2　9：50～10：30

［ 感　染 ］　座長：喜多村 泰輔（福岡大学病院 救命救急センター）

O2-1　診断に苦慮した B 群溶血性レンサ球菌による化膿性脳室炎の一例

中島 聡美　東京女子医科大学八千代医療センター 救急科・集中治療部

O2-2　高齢者肺炎治療におけるネーザルハイフローの意義

簾本 恵介　深川市立病院 救急部

O2-3　合併症なく治療し得た未破裂脳動脈瘤を合併した高齢者破傷風の一例

宮崎 允宏　久留米大学高度救命救急センター

O2-4　伝染性単核球症が疑われた A 型肝炎の一例

山田 万里子　東京女子医科大学病院 救急医学講座

一般演題3　10：40～11：40

［ その他 ］　座長：池田 寿昭（東京医科大学八王子医療センター 特定集中治療部）

O3-1　脳ヘルニア徴候をきたした急性硬膜下血腫に対し HITT が有効であった一例

加藤 脩太郎　日本医科大学武蔵小杉病院 救命救急センター

O3-2　汗中乳酸測定による救急外来モニタリングへの応用

森澤 健一郎　聖マリアンナ医科大学病院 救急医学

O3-3　急性期心原性脳塞栓症に対して血栓回収術を行った1例

桝田 悠喜　地方独立行政法人山梨県立病院機構 山梨県立中央病院

O3-4　内因性心肺停止患者におけるドクターヘリの適応と有効性

山根 綾夏　国保直営総合病院 君津中央病院

O3-5　脳幹型 Posterior reversible encephalopathy syndrome の1例

林 洋輔　東千葉メディカルセンター 救急科

O3-6　長期間の集中治療管理を必要とした辺縁系脳炎の1例

萬木 真理子　久留米大学病院 高度救命救急センター

協賛セッション　14：30～15：30　協賛：旭化成ファーマ株式会社

［ 敗血症性 DIC の治療 ］　座長：江口 豊（滋賀医科大学 救急集中治療医学講座）

SS-1　敗血症性 DIC に対する抗凝固療法の変遷と成績

田畑 貴久　滋賀医科大学 救急集中治療医学講座

SS-2　敗血症モデルにおけるリコンビナント・トロンボモジュリンの抗炎症・微小循環改善効果

渡邉 栄三　千葉大学大学院医学研究院 総合医科学講座
千葉大学大学院医学研究院 救急集中治療医学

SS-3　Septic DIC 治療における AKI 症例への対応

鈴木 泰　岩手県高度救命救急センター

SS-4　播種性血管内凝固（DIC）を合併した敗血症に対する DIC 治療薬の有効性の検討

菅原 久徳　山梨大学 医学部 救急集中治療医学講座

一般演題4　15：40～16：50

［外傷・熱傷］

座長：溝端 康光（大阪市立大学大学院医学研究科 救急医学）
小谷 穣治（神戸大学大学院医学研究科 外科系講座 災害・救急医学分野）

O4-1　外傷性後咽頭間隙血腫から上気道狭窄を来した1例

大城 剛志　昭和大学藤が丘病院 救急医学科

O4-2　2017年度、当院において実施した大動脈内バルーン遮断（REBOA）6例の検討

松成 修　大分大学医学部附属病院 高度救命救急センター

O4-3　多角的アプローチによる外傷外科医養成の試み

溝端 康光　大阪市立大学大学院医学研究科 救急医学

O4-4　分層植皮・人工真皮・NPWTを併用したオーバーラップ法についての有用性

上田 敬博　近畿大学 医学部 救急医学講座

O4-5　自傷による前胸部刺創の1症例

丹保 亜希仁　旭川医科大学 救急医学講座

O4-6　正中弓状靭帯症候群による下膵動脈瘤破裂に対して、血管内治療を行った一例

丹沢 瑞貴　山梨県立中央病院 救命救急センター

O4-7　2度の造影CTでも検出できず、DPLによって診断できた外傷性腸管損傷の1例

藤原 弘之　地方独立行政法人 山梨県立病院

抄　　録

特 別 講 演

シンポジウム

協賛セッション

イブニングセミナー

一 般 演 題

Critical Care における “Less is More”

平澤 博之
千葉大学 名誉教授

われわれは重症患者を扱ってきたが故に、人工補助療法の設定を最大限にしたり、各種の薬物療法では最大限量を投与するというようなことをしばしば行ってきた。しかし近年、人工補助療法にしろ薬物療法にしろ、aggressive な治療法は同時に生体に対する侵襲ともなりうることが指摘され、post intensive care syndrome なる概念も提唱された。それとともに mild な治療法が結局はより有効であるとして、“Less is More” なる概念が提唱されるようになった。

“Less is More” なるアプローチは各種の治療法に関し検討されているが、最も典型的な例は low tidal volume ventilation である。すなわち injurious setting 下での ventilatory support は、ventilator-induced lung injury を引き起こすことや、さらには肺以外の臓器をも損傷をするという biotrauma なる概念も提唱されている。そして最近になり biotrauma の病態は肺における各種細胞の損傷に伴う damage-associated molecular patterns の産生と pattern recognition receptors によるその認識、そしてその結果としての hypercytokinemia によることも晃かになってきた。

“Less is More” の概念が適応されるべき管理法は ventilatory support にとどまらず、投与熱量を消費熱量よりも少なめにする、cardiopulmonary arrest に対する体温管理療法は34℃を目標ではなく36℃を目標とする、血糖コントロールは70～150㎎/dL ではなく150～180㎎/dL を目標とする、酸素投与は SpO_2 100% ではなく94～98% を目標とする、など多岐にわたっている。

一方 “Less is More” なるアプローチは消極的な患者管理となるリスクと背中合わせである。Aggressive な方向に傾いていた振り子が今はより mild な管理法の方に振れつつあるが、やがては “Just is Just” というようところに落ち着くかも知れない。以上、本講演では critical care における “Less is More” なる各種のアプローチとその rationale、さらには今後の展望などに関し最近に知見を述べたい。

S1-1

中枢神経系重症患者に対して体温管理を行うための注意点を総括する

○守谷 俊[1)]、柏浦 正広[1)]、櫻井 淳[2)]、木下 浩作[2)]
1）自治医科大学附属さいたま医療センター 救急科
2）日本大学 医学部 救急医学系救急集中治療医学分野

【背景と目的】重症患者に対する温度管理の重要性が最近強調されている。さらには、救外来院後、出来るだけ早く行うことが重視されている。現状においては、人手をかけず、確実に効果が期待できる手法の開発が発展している。しかしながら、重症患者の呼吸状態や循環状態の安定化を図らずに温度管理をすることは、従来の重症患者の管理原則に適していないのではないだろうか。自験例から重症脳損傷患者に対する温度管理の重要性を明らかにする。

【対象と方法】1997年1月から2018年6月までに筆頭演者が在籍した2施設で体温管理を行った862例。

【結果】冷却から維持期においては、

(1) hypothermia induced polyurea の出現によって尿量増加と血清カリウム、カルシウム、リンの低下や尿中の増加を認めた。
(2) 体温低下においては、体重に対して表面積の大きい小児においては過冷却となりやすい。
(3) 同じ成人であっても BMI が高いほど、目標体温に達するには時間がかかった。

復温期から復温後期においては、

(1) 温度管理療法の終了時に管理するブランケット温が25℃ 以下の場合には、post-hypothermia hyperthermia 発生の確率が高まった。
(2) 温度管理中では、加算脳波により後頭部優位の場合に予後良好である可能性が高い。
(3) 電気生理学的評価法では、SEP N20が予後良好の指標となりやすかったが、来院直後では困難であった。

これに対して MEP が凌駕する可能性がある。

【結語】TTM を中心とした全身管理の重要性を強調する。温度管理技術の向上が今後の重症患者に対する温度管理データの信憑性をあげることとなる。

S1-2

急性脳障害に対する体温管理療法の現状と課題

○畝本 恭子[1)]、齋藤 研[1)]、羽鳥 綾乃[1)]、佐藤 慎[1)]、田中 知恵[1)]、金子 純也[1)]、中山 文彦[1)]、福田 令雄[1)]、北橋 章子[1)]、田上 隆[1)]、久野 将宗[1)]、工藤 小織[1)]、横田 裕行[2)]
1）日本医科大学多摩永山病院 救命救急センター
2）日本医科大学付属病院 高度救命救急センター

【はじめに】意識障害を呈する急性脳障害に対する脳低温療法（体温管理療法：以下 TTM）は、心停止後症候群（以下 PCAS）など、有用とされる病態もある一方、未だ十分なエビデンスが得られない疾患もある。目標温度、持続時間についても一定の見解はない。PCAS に対しては、36℃ 群の常温療法が33℃ の低温療法に対し非劣性であることが示された（Nielsen 2013）。また、この結果を受けてか、重症頭部外傷（sTBI）に対する体温管理も低温療法より常温療法にシフトしている（頭部外傷データバンク 2015）。

【目的】当救命救急センターにおける過去6年間の TTM 施行例の、脳保護療法としての意義を検証する。

【方法】2012年～2017年の6年間に当救命救急センター（三次救急）に搬送された症例のうち、診療録上の‘低体温療法’、‘平温療法’、‘体温管理療法’などのキーワードを元に、転帰を中心に検討した。なお、熱中症、偶発性低体温は除外した。なお、2016年以降 PCAS については34℃24時間の体温管理のプロトコルを徹底した。

【結果】全入院5,608例中、TTM 施行例は143例（低体温128例、常温15例）である。対象疾患は PCAS92例、脳卒中（くも膜下出血、脳出血）15例、頭部外傷34例、縊頸による低酸素脳症、痙攣重積各1例であった。PCAS については、脳機能カテゴリー（CPC）1, 2の転帰良好例が50% 以上であり、TTM は有用かつ必要な介入であることが示唆された。PCAS の懸案のひとつであるミオクローヌス、痙攣については、効果は得られなかった。脳卒中、頭部外傷は主として脳浮腫の制御の目的で導入されたが、神経学的予後の改善は証明しえない。

【考察】全脳虚血の場合、細胞レベルの急性脳障害をきたすまでの時間が院外で経過する。脳低温療法も、ダメージがなかったことにすることはできず、最近では、‘熱くならない管理’に留める傾向にある。病院前活動も含め、効果的な体温管理を試みる時期ではないか。

投　稿　規　定

日本救命医療学会雑誌（Journal of Japanese Society for Critical Care Medicine, 以下本誌と略す）は，日本救命医療学会の機関誌であり，救命医療の進歩に寄与することを目的とするものである．

本誌の掲載論文は，投稿または依頼によるものとし，総説，原著，臨床研究，症例報告，等とする．論文は査読制とし，その採否は編集委員会において決定する．

１．投稿内容

投稿論文は上記の趣旨をふまえた創意に富んだ論文で，他誌に発表されていないものとする．

同一の論文を他誌に投稿中の場合には採用しない．論文の一部を他誌に発表している場合には，それを引用していることを明記し，コピーあるいは別冊を付けて投稿する．

また，一定の要件（参照：secondary publicationのための要件）を満たしており，編集委員長がそのことを認めた場合，その投稿論文をsecondary publicationとして査読の対象とする．

日本語もしくは英語での投稿を受け付ける．英語で投稿の場合，あらかじめネイティブスピーカーの校正を受け英文校正証明書（書式自由）を添付する．また英文抄録とともに和文抄録を付すこと．

２．投稿者の資格

筆者または共同著者のうち1名は本学会会員であること．

３．論文の構成

①タイトルページ，②和文抄録（英文投稿では英文抄録+和文抄録），③本文，④引用文献，⑤図・写真の説明文，⑦図・写真，⑧表，の順に記載する．

４．論文の長さ

１）投稿原稿はＡ4判800字詰め（25字×32行）用紙で，総説，原著，調査研究は20枚以内，症例報告は12枚以内とする．

２）和文抄録は総説，原著，調査研究で800字（英文400 words）以内，症例報告で400字（英文200 words）以内とする．

３）図・写真・表1枚は，それぞれ用紙半ページ（400字相当）と計算し，原稿枚数に含める．

５．論文の記載方法

【Ａ】記載方法の原則

１）ワード文書形式，Power Point, テキストファイルを用いて，原則として和文で記述する．

２）横書きでA4判の用紙に25字×32行で印字する．英文はdouble spaceで印字する．

３）用語は現代かな使いにしたがい，医学用語を除き常用漢字とする．

４）外国人名，地名は原語を用いる．

５）薬品名は一般名で記載し，商品名を記載するときは括弧内に記す．

６）特殊な試薬，機器などは必要に応じ，種類，会社名と，外国の場合はその所在地（国名）を括弧内に記載する．

６）度量衡はCGS単位とする．

７）論文にしばしばくりかえされる語は略語を用いて差し支えないが，初出のときは完全な用語を用い，以下に略語を使用することを明記する．

８）著者校正は初校のみとする．校正時の追加，削除は原則として認めない．

【Ｂ】表紙

１）論文の種類
総説，原著，臨床研究，症例報告，等の区分を記載する．

２）表題
表題は簡潔でかつ必要な情報を盛り込むこと．略語は使用しない．実験的研究の表題には実験的研究と判るように，使用した種またはモデルを明記する．

３）所属

４）著者名（著者の数は7名以内とする）

５）英文表題

６）英文所属名

７）英文著者名（First FAMILY）

８）索引用語（5語以内）
- 物質名，外国の固有名詞は原語で表記するとともに，慣用されているものはカタカナでも併記する．
- 英文で投稿した場合には索引用語も英単語とする．

９）筆頭著者連絡先
郵便番号，所在地，所属機関，部署名（もしく

は自宅連絡先），電話，FAX，e-mail address

【C】論文本体

原著・臨床研究の記載は，原則として和文抄録，はじめに，方法（対象と検討方法），結果，考察，おわりに（または，結語），（謝辞），引用文献の順で記載する．症例報告の記載は，原則として和文抄録，はじめに，症例，考察，おわりに（または，結語），引用文献の順で記載する．

別に記した**【記載上の注意】**を読んでこれに準拠する．

【D】引用文献

1）本文に肩付けした引用番号で示し，引用順に番号を付け記載する．

2）誌名略記について，日本文献は医学中央雑誌略名表に，外国文献はIndex Medicusに従う．

3）著者，編集が3名以上の際には3名まで列記し，それ以上は，他，またはet al.とする．

（1）雑誌の場合，著者名：題名．雑誌名，年；巻：始頁－終頁の順に記す．

例1）Ehrnthaller C, Amara U, Weckbach S, et al: Alteration of complement hemolytic activity in different trauma and sepsis models. J Inflamm Res 2012; 5: 59-66.

例2）小野寺ちあき，小鹿雅博，高橋学，他：敗血症ショック患者に対する抗tumor necrosis factor モノクローナル抗体（TNFMab）投与が効果的であった一症例．日救命医療会誌 2011; 25: 43-48.

（2）書籍（単行本）の場合，著者名：題名．書籍名，巻，版，（編集者名，編），発行所，発行地，年：始頁－終頁の順に記す．発行地は1ヶ所のみとする．

例）日本日本呼吸器学会ARDSガイドライン作成委員会：ALI/ARDS診療のためのガイドライン，第２版．学研メディカル秀潤社，東京，2010, pp18-21.

（3）電子媒体（インターネット）の場合，（著者:）題名．Webアドレス，アクセス日，年の順に記す．

例）平成21年人口動態統計月報年計（概数）の概況．厚生労働省ホームページ；
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai09/index.html. Accessed March 10, 2011.

4）電子媒体（インターネット）によるものは，引用内容の科学性や倫理性を加味して変更を求める場合がある．

5）学会・研究会等の抄録は文献としては認めない．

【E】表

1）表は白黒に限る．やむなくカラー写真を用いる場合は，著者が実費を負担する．

2）脚注には，表番号，タイトル，データの表示方法，略号，有意差の記号の解説，等を記す．

【F】図・写真

1）図･写真はMicrosoft Excel/Power Pointで作成する．

2）図・写真は白黒に限る．やむなくカラー写真を用いる場合は，著者が実費を負担する．

3）組織像には，染色法と倍率を明記する．

【G】図，写真の説明文

1）図・写真の説明文は，図・写真とは別にＡ４用紙にまとめて記載する．

2）説明文では図・写真番号，タイトル，データの表示方法，図中の略語，記号について記載する．

６．倫理規定

ヒトを対象とした研究にあたっては，インフォームドコンセントおよび所属施設の倫理委員会ないしそれに準ずる機関の承諾を得ていることが望ましい．また個人情報保護のため，匿名化し，個人が特定されるような記載は避ける．十分な匿名化が困難な場合には，同意を文書で得ておくこと．

７．利益相反

臨床研究（医薬品，医薬部外品，健康食品，医療機器等）に関する論文は，利益相反関係（例：研究費・特許取得を含む企業との財政的関係・当該株式の保有等）の有無を本文末尾に明記しなければならない．利益相反がある場合には，関係する企業・団体名を明記する．

注）利益相反に関する記載例

・本研究は○○○○の資金提供を受けた．

・○○○の検討にあたっては△△△△から測定装置の提供を受けた．

・利益相反はない．

８．原稿送付について

1）E-mailに原稿データを添付して送信する．添付するデータはMicrosoft Word/Excel/Power Point等，編集可能な形式とする．

2）送信先：jsccmkurume@med.kurume-u.ac.jp
連絡先 〒830-0011

福岡県久留米市旭町６７
久留米大学医学部救急医学講座
日本救命医療学会編集事務局　高須 修
TEL 0942-31-7732　FAX 0942-35-3920

９．その他

１）掲載後の全ての資料の著作権は社団法人日本救命医療学会に帰属するものとする．
ただし，著作権を移譲した著者が自ら作成した図表等を再使用する場合には，出典を明記すれば本会の許諾を必要としない．

２）別冊は希望により，実費にて作成する．

【参照】secondary publicationための要件

１）secondary publicationとは日本語以外の言語で出版されたprimary versionのデータ・解釈に関し，それを忠実に反映して日本文で書かれたものである．

２）primary versionの編集者からsecondary publicationの同意が得られていること．

３）secondary versionの論文のタイトルページの脚注に，primary versionの論文を参考にしたことを明確に記載する．

４）primary versionのコピーあるいは別冊を付けて投稿する．

５）出版の優先権はprimary versionにあり，少なくとも1週間の間隔をあけて出版する．

（平成26年9月19日改訂）

編集委員長　高須 修
編集委員　池田弘人，石川雅健，織田成人，
北澤康秀，北野光秀，貞廣智仁，
庄古知久，鈴木泰，平泰彦，星野正巳，
増野智彦，溝端康光（50音順）

【記載上の注意】（参考にして下さい．）

〔A〕和文抄録（800字以内）

1. 抄録には研究の目的，対象･材料および方法，重要な新しい知見（可能なら実際のデータ），主な結論を明確に記述する．
2. 略語および参考文献を記載しない

〔B〕はじめに

1. 研究背景，研究目的を記載する．
2. 実際の研究データあるいは結論を記載しない．

〔C〕方法（対象･材料および方法，統計処理を含む）

1. 必要に応じ適切な小見出し（対象，材料，方法，統計，など）を用いる．
2. 研究の対象（材料）および方法を明確に記載する．
3. 倫理に関しては以下のように報告する．
   - ●動物実験では準拠した動物の取り扱いに関するガイドラインを記載する．
   - ●臨床研究では，侵襲の加わる場合は患者の同意などについて記載する．
4. 統計解析の項では，結果の表示方法（平均値，標準誤差，標準偏差，など）使用した統計学的手法，信頼限界を記載する．

〔D〕結果

1. 本文中では重要な知見を強調し，主要な結果を要約する．過剰なデータを記載しない．
2. 結果は，本文中，表中，図中に重複して表示されていないか留意すること．
3. 学会スライドに用いた図をそのまま流用しないこと．
   スライドは表示時間も短く，繰り返しての表示は出来ない．限られた時間内で如何に演者の主張を理解してもらうかに重点を置いて印象的な図を作成すべきである．一方，論文中の図は正確さに重点を置いて記載すべきで，スライドの図を流用すべきではない．特にカラースライドから白黒の図にした場合には，グレーの濃淡の区別などに留意すべきである．
4. 数値で記載する場合には，有効数字の意義について検討した上で記載すること．

〔E〕考察

1. 緒言，方法，結果で述べたことをくり返さずに簡潔に記載する．
2. 研究の重要な知見を強調し，その知見の意味することについて論じる．

（平成26年9月19日改定）

共催・協賛・広告企業一覧

広告掲載

アイ・エム・アイ株式会社
旭化成メディカル株式会社
アボットジャパン株式会社
アステラス製薬株式会社
一般社団法人 日本血液製剤機構
MSD 株式会社
株式会社大塚製薬工場
小野薬品工業株式会社
協和医科器械株式会社
CSL ベーリング株式会社
株式会社 JIMRO
泉工医科工業株式会社
第一三共株式会社
武田薬品工業株式会社
帝人ファーマ株式会社
テルモ株式会社
鳥居薬品株式会社
日機装株式会社
ニプロ株式会社
日本製薬株式会社
バクスター株式会社
ファイザー株式会社
豊前医化株式会社
扶桑薬品工業株式会社
マコト医科精機株式会社
丸石製薬株式会社
株式会社明治
レールダルメディカルジャパン株式会社
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社

HP バナー

旭化成ファーマ株式会社
ドレーゲル・メディカルジャパン株式会社

機器展示

旭化成ゾールメディカル株式会社
エドワーズライフサイエンス株式会社
コヴィディエンジャパン株式会社
泉工医科工業株式会社
東レ・メディカル株式会社
ニプロ株式会社
日本光電工業株式会社
ネスレ日本株式会社
株式会社フィリップス・ジャパン
ラジオメーター株式会社

セミナー

旭化成ファーマ株式会社
日本光電工業株式会社

寄付金協賛

医療法人社団 慶心会
医療法人徳洲会 白根徳洲会病院
医療法人静正会 三井クリニック

第33回日本救命医療学会総会・学術集会の開催にあたり、多くの企業様から共催および協賛･広告･展示をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

第33回日本救命医療学会総会・学術集会
会 長 松田 兼一

第33回日本救命医療学会総会・学術集会
プログラム・抄録集

2018年8月27日　発行

会　長：松田 兼一

事務局：山梨大学医学部 救急集中治療医学講座
担当：森口 武史
〒409-3898 山梨県中央市下河東1110
TEL：055-273-9812　FAX：055-273-6716
E-mail：jsccm33rd2018-office@umin.ac.jp

出　版：株式会社セカンド
〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793　FAX：096-386-2025
https://secand.jp/

第33回 日本救命医療学会 総会・学術集会
事　務　局

山梨大学医学部 救急集中治療医学講座

〒409-3898 山梨県中央市下河東1110
TEL: 055-273-9812　FAX: 055-273-6716
E-mail : jsccm33rd2018-office@umin.ac.jp